

Shall we?

男女で共に考える、私たちのこれから

三鷹市
男女平等参画啓発誌

2023年
vol.

77



女性の参画で変わる！ 進化する防災

女性の参画で変わる！ 進化する防災

東日本大震災をはじめとする大規模災害を機に、防災に女性の視点を盛り込むことの重要性が、広く認識されるようになりました。かつて、私たちの意識には“防災の担い手は男性”というジェンダーバイアスに基づくイメージが広く浸透していたのではないのでしょうか。しかし今、少しずつ、そして着実に、身近な地域で防災に取り組む女性たちが増えてきています。今回の『Shall we?』では、女性の視点やニーズを取り入れることで、より多くの人にとって実効性の高いものへと変わりつつある防災について、三鷹市内の事例を交えてご紹介します。

災害時に女性が直面する問題

被災地では、女性たちが以下のようなさまざまな課題に直面することが浮き彫りになりました。

性別による役割分担の増大

炊き出しやケアは女性、力仕事は男性という固定的な性別による役割分担の意識が平時以上に強まる。ライフラインがない中での家事の重労働化 など

プライバシーや衛生

着替えや授乳が困難、下着が干せない、乳幼児・障がいのある人・認知症の人とその家族が避難所に居づらい。不衛生なトイレ など

女性に顕著な疾患

トイレの利用を控えることによるぼうこう炎、衛生状態の悪化による外陰炎などの増加。熊本地震では、エコノミークラス症候群重症患者の約8割が女性

物資の不足と配布方法

女性用品・下着、育児・介護用品の量的不足とサイズ・種類の不足。男性のみによる配布、在宅避難者が物資を受け取れない など

DV・性暴力・性的ハラスメント

幅広い年代の女性と子どもが被害を受けるリスクが高まる。非常時であるとの意識から、被害者は平時以上に声をあげづらい

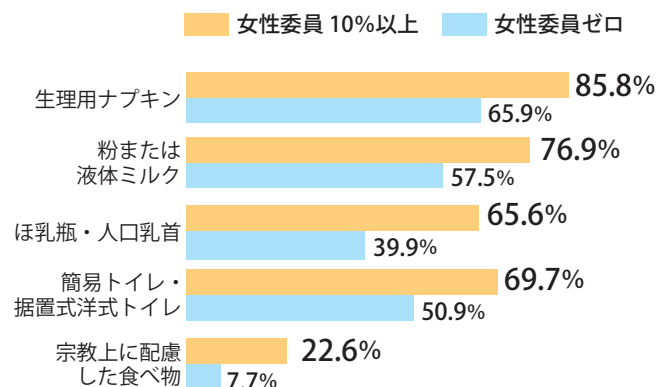
カギを握るのは防災への女性の参画

災害時における女性のニーズや課題に当事者意識をもって向き合い、対策を講じていくためには、平常時から防災のしくみ作りや防災に関する意思決定の場に、女性が主体的に携わっていく必要があります。

しかし、国の調査によると、防災会議の女性委員割合が10%未満の市区町村は、全国で約58%にもなります(※1)。また、防災会議の女性委員割合が10%以上とゼロの市区町村を比較したところ、女性・乳幼児・高齢者・外国人向けの備蓄33品目のうち31品目において、女性委員割合10%以上の市区町村の方が備蓄が進んでいることが明らかになりました(右表・※2)。

このことから、多様な人への配慮がある防災を実現するカギとなるのは「女性の参画」と言えそうです。

●市区町村防災会議の女性委員割合と常備備蓄の割合の比率 (主な5品目を抜粋)



※1 地方公共団体における男女共同参画社会の形成又は女性に関する施策の推進状況(2022年度 内閣府男女共同参画局)

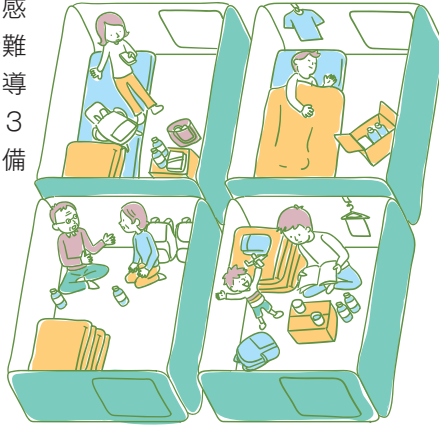
※2 地方公共団体における男女共同参画の視点からの防災・復興に係る取組状況についてフォローアップ調査(2023年5月 内閣府男女共同参画局)

女性の視点とニーズで変わってきました 三鷹市の防災アップデート

三鷹市では防災分野において、女性への配慮や女性の参画につながる次のような取り組みが進んでいます。

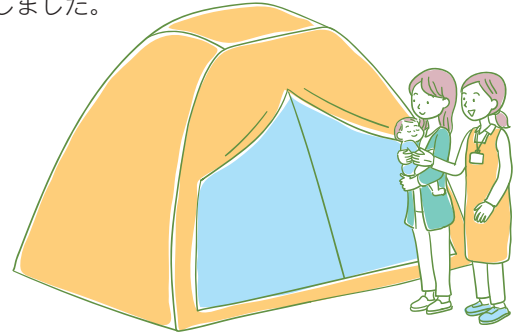
避難所にパーテーションを導入

プライバシーの保護と感染症対策のため、全避難所にパーテーションを導入しました。2020年3月までに計2,475基の備蓄が完了しました。



避難所にプライベート TENT を配備

三鷹市助産師会からの提案を受け、着替えや授乳、お産に使えるプライベート TENT を全避難所に配備しました。

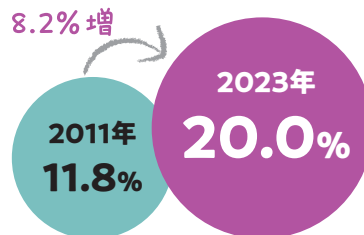


市役所防災課に女性職員を配属

2013年に初めて女性職員を防災課に配属して以降、常に女性職員がおり、現在は3人の女性職員が防災課に所属しています。

三鷹市防災会議の女性委員比率

東日本大震災当時の2011年と比較すると、8.2%の増加となっています。



乳幼児の保護者向け防災出前講座の実施

市民グループなど各種団体からの依頼を受けて、防災士の資格を持つ防災課職員が出前講座を行い、紙コップを使った授乳方法や液体ミルクなど、乳幼児がいる家庭での備えについてお話ししています。



生理用品・おむつの分配

2015年頃まで1か所の倉庫で保管していた生理用品を昼・夜用に、乳幼児用おむつをS/M/Lサイズに分け、必要枚数を計算したうえで各避難所に分散して備蓄するようにしました。



三鷹市地域防災計画(2021年改定)では、避難所の運営について次の項目が盛り込まれています

※震災編第2部第9章「要配慮者等への支援」より一部抜粋。

- 避難所においては、男女別の更衣室、トイレ、洗濯物干し場、授乳室、女性の専用室等の設置のほか、生理用品や女性用下着の女性による配布など、女性、乳幼児等のニーズに配慮した避難所の設営及び運営を行う。
- 女性・乳幼児等の視点やニーズを踏まえた生活用品や乳幼児用品の備蓄を推進するとともに、物資の調達体制を整備する。
- 避難所における高齢者や障がい者への配慮や支援を実施するための方策を、高齢者や障がい者のニーズを踏まえて、避難所運営マニュアルの中に位置づけるとともに、避難所運営連絡会等において、LGBTの方等への配慮を考慮した避難所運営のあり方についても検討を進める。
- 避難所の運営においては、管理責任者に女性を配置するなど女性の参画を推進するとともに、男女のニーズの違い等男女双方の視点等に配慮する。

をリードする女性たち

新妻さんがトーク会で
紹介している携帯トイレ



三鷹市在住の新妻さんは東日本大震災の当時、避難所でトイレの衛生状態の悪化が深刻な問題になっているという報道を目にして、強い危機感を覚えたといいます。そこで、NPO日本トイレ研究所の個人会員になり、トイレに関する情報と知識を身に付けて、防災トイレアドバイザーの資格を取得。2019年からは、10年以上にわたる蓄積から得た知見を広く伝えるため、「防災・防犯のための女子トーク会」と題するイベントを8回にわたって開催しています。

「災害時には性犯罪が起きやすくなります。女性にとって危険な場所になりやすいトイレの防災と防犯は近い課題なんです」という新妻さん。携帯トイレを家や車、バッグに備えておくことに加え、公共のトイレは設置・改修をする段階から、待ち伏せをしたり逃げ場をふさいだりすることがしにくい構造にするなど、犯罪が起きにくい設計にしていけばと警鐘を鳴らしています。



女性のための防災・
防犯勉強会 in 三鷹

防災トイレアドバイザー
新妻敦子さん

女性にとって
トイレの防災と防犯は
近い課題です



学校を核に
子どもから大人、
そして地域全体に
防災の輪を広げています

(一社)みたかSCサポートネット
代表理事
師橋千晴さん



地域子どもクラブを運営している師橋さんが防災に力を注ぐようになったきっかけは、東日本大震災の揺れを三鷹市立第三小学校で体感したことでした。

「その日は保護者会が行われていました。突然の大きな揺れに子どもも親も慌てふためく様子を目の当たりにして、このままではいけないと思ったんです」と、当時を振り返ります。

そして、師橋さんは仲間とともに防災を学ぶことから始め、2013年には子どもたちに知ってほしい防災の知識をまとめた冊子「カンガエル地域防災」を刊行。この冊子は小・中学校の防災授業のテキストとして使われています。師橋さんたち「(一社)みたかSCサポートネット」のメンバーが防災授業の講師やコーディネーターを務めている三鷹中央学園は、小学1年生から中学3年生までの9年間を通して子どもたちが段階的に防災を学ぶ教育カリキュラムを実施しており、市内の防災先進学区となっています。



(一社)みたかSC
サポートネット



三鷹中央学園地域防災テキスト
「カンガエル地域防災」

女性が防災に
携わることは、
誰も取り残さない防災に
つながっています

三鷹の防災力を高めていくための組織「Mitaka みんなの防災」は、2022年9月に設立されました。その準備段階から市の防災課職員として携わってきた藤田さんは、2023年4月から常駐で事務局を務め、個別に活動していた防災団体のネットワーク化や、連携のための情報発信をしています。また、ママ防災士として乳児向けのサロンに出向いて赤ちゃんがいる家庭の備えを紹介したり、ペット防災指導員の資格を生かして獣医師会と連携し、ペットとの同行避難の環境整備に取り組んだりもしてきました。

防災を通して多くの女性たちと知り合う中で藤田さんは「女性の視点を防災に生かすことは、女性だけでなく、高齢者や障がいのある人、外国人など、多様な人にとっての安心につながる」と感じているといいます。女性が地域の防災に向き合うことは、防災を本当の意味で“みんな”のものにすることでもあるようです。

NPO法人Mitakaみんなの防災事務局
藤田優美さん



ご紹介します！

三鷹の防災

仕事をきっかけに
防災がライフワークに
なりました



やろうよ！こどもぼうさい副代表
半田美美さん

半田さんが副代表を務める「やろうよ！こどもぼうさい」は、子どもたちに自分の命を守る方法を伝えたいという志を持つ有志が集まった市民団体です。これまでに、JA東京むさし・市内農家との協働で、たき火で焼き芋を作りながら災害時の農地の機能を知ってもらう「農業×防災イベント」や、夏休みに防災設備・施設をめぐる「防災街歩き」など、親子で楽しめる催しを数多く企画・実施してきました。

実は、半田さんは2013年に三鷹市で初めて防災課に配属された女性職員。仕事を通して防災に目覚め、他部署への異動を機にプライベートでも防災に取り組もうと、この団体に参加しました。

「三鷹生まれ三鷹育ちの私が思いを持って取り組めるものが、防災なんです。災害は全市民共通のリスクで、そのリスクがあまりにも大きいからこそ、自分ができることをしたい」と語る半田さん。地元への熱い思いを胸に、これからも防災の大切さを伝え続けていきます。



防災団体やろうよ！こどもぼうさい



「防災街歩き」の様子

大塚さんは大沢地区で10年以上、自主防災組織や住民協議会の防災部会に携わってきました。その中で、防災活動のあり方は少しずつ変わってきたといいます。

「昔は“防災は真面目にやるもので楽しむのは不謹慎”という風潮がありました。でも、今は気軽に楽しめるイベントの中に防災の要素を入れるなど、多くの人が参加して、知ってもらうことが大事だという認識が定着してきました」

昨年の大沢地区の防災訓練では、大塚さんの提案で初めて授乳室を用意しました。それは、「赤ちゃん連れの人も参加できますよ！」というメッセージであり、同時に、配慮が必要な人に寄り添う姿勢を示すことにもつながると考えたからだそうです。

こうした実績を買われて、2023年7月から大塚さんは三鷹市防災会議の委員に選ばれました。市の意思決定の場に生活者の視点を届ける存在として、期待が寄せられています。



防災活動の
あり方が昔とは
変わってきました

三鷹市防災会議委員
大塚英子さん



ご近所同士の
つながりこそが
最大の防災です

井の頭一丁目町会会長
竹上恭子さん

「井の頭一丁目は、避難所や避難場所から遠く、防災施設もない地域でした」という竹上さん。東日本大震災を機にそのことに気づいた竹上さんたちは、町会として市に協力を要請し、2014年には三鷹台児童公園が「災害時在宅生活支援施設」に指定されました。それ以来、月1回の「防災を考える会」を継続的に開催しています。他にも、同公園の防災倉庫を知ってもらうために保育園児の絵で倉庫の壁を飾る「こども美術館」や、回覧板を回す班ごとの「防災ランチ会・お茶会」を企画するなど、「防災を日常に！」をスローガンにユニークな取り組みを行っています。また、2018年からは町会のFacebookを立ち上げて、各種催しの告知や開催報告を頻繁に投稿し、情報を発信しています。

「こうしたご近所のつながりが、災害時の共助の基盤になるのだと思います」と、竹上さん。さまざまな手法で住民同士の交流の場をつくり、地域の防災力を高めています。



防災倉庫を利用した「こども美術館」



井の頭一丁目町会Facebook

ここでご紹介した皆さんの詳しいお話は
「Mitakaみんなの防災」公式サイトでご覧いただけます！



配慮から参画へー防災分野の男女共同参画がもう一步前進するために

静岡大学グローバル共創科学部教授

減災と男女共同参画 研修推進センター・共同代表

池田恵子さん

◆◆防災分野の男女共同参画 「配慮」は進むが「参画」は？

防災分野の男女共同参画は、近年大きく進展しています。しかし、詳しく見てみると、この進展には偏りがあることが分かります。災害時の女性のニーズへの「配慮」と比べると、女性が防災の意思決定の場に「参画」することは遅れています。

内閣府男女共同参画局が2023年5月に公表した「地方公共団体における男女共同参画の視点からの防災・復興に係る取組状況についてフォーアアップ調査」によると、物資の備蓄については、生理用品(全国市区町村の83%が備蓄や粉ミルク(同72%)など女性用品や子育て用品の常時備蓄は大幅に改善しています。避難所運営については、70%以上の市区町村がガイドライン類で男女別の更衣室・トイレ、授乳室を設置すると記載していますが、避難所運営への女性の参画を推進する記載は59%にとどまります。防災・危機管理部に女性職員が1人も配置されていない市区町村は61%を占めます。地方防災会議の女性委員比率は、2020年頃まで増えましたが、最近伸び悩んでいます。地域コミュニティの防災の要である自主防災組織に至っては、女性の参画を促進する取り組みをした市区町村は30%だけでした。

◆◆防災分野における 女性の「参画」の重要性

「やる気のある男性が、災害時に女性に配慮したことを提案、実行すればいい」「無理に女性が防災分野に参画しなくてもよい」と考える人もいます。はたして、それでしょうか。

女性に限らず、多様な立場や事情がある本人たちを抜きにして考えても、的を射た質の高い被災者支援になるとは限りません。また、女性を「配慮が必要な人」とみなして主体性を認めないなら、防災を自分ごとと感ぜられない市民をわざわざ増やすようなものです。

女性が参画することで多様なニーズを反映した適切な配慮が進み、配慮が進むことで女性は防災の担い手として参画しやすくなります。災害時に配慮を要する人々が多岐にわたる中、女性の参画を促すことは、防災や被災者支援の担い手を増やすことにもなります。

◆◆性別役割分担を見直して、 災害に強い社会へ

防災分野は、性別役割分担や性別職務分離を意識しやすい分野であり、このことが女性の参画が進みにくい理由の一つだと考えられます。救援活動や復旧作業は力仕事のイメージがあり、夜間の対応も生じるため、男性の仕事とみなされがちです。しかし、防災分野は、災害への備え、被災後の避難生活、健康、安全、子育てや介護など、幅広く長い期間にわたる課題を扱う分野です。

自治体の防災・危機管理担当部署へ女性職員の配置が進まないのも、宿泊勤務があり、とりわけ小さい子どもや介護が必要な家族がいる女性職員は、本人も人事担当部署も配属を避けるからだとの指摘があります。ここにも、家族のケアは女性の責任だという考えがあります。しかし、家族のケアをしている男性職員も、今日では珍しくないでしょう。女性職員が安心して宿直できる環境づくりや、男女の職員向けに災害時の

託児の体制を整えるなどの対策を整備し、男女問わず職員が力を発揮できるようにすることが望ましいです。

地域の自主防災組織の役割に女性が少ないことにも、地域のリーダーは男性という平常時の性別役割分担が反映されています。地域活動の多くを女性たちが下から支えているのですが、防災活動における女性の役割は炊き出しや救護に限られている地域も多くみられます。これは大変残念なことです。男女が共に担い、性別にこだわらず、できる人ができることをする社会の方が災害に強いことは明確でしょう。

とりわけ、全国的な傾向として、自主防災組織の基盤となっている自治会・町内会などの地域組織は担い手の高齢化と組織率の低下などによって硬直化・弱体化しつつあります。女性の参画は、その打開策の一つにもなるでしょう。

Profile

池田恵子(いけだけいこ)

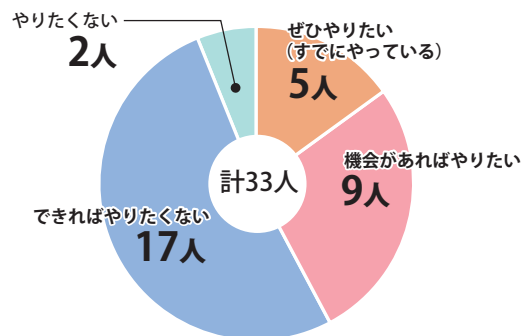
静岡大学グローバル共創科学部長・教授。減災と男女共同参画 研修推進センター・共同代表。国際協力の現場を経て、2000年より静岡大学教員。ジェンダー・多様性の視点による防災・災害対応・復興について日本とバングラデシュなど南アジアの国々を対象に研究。防災や災害対応へジェンダー視点を導入するための研修、制度づくり、教材作成などにも従事。



市民の皆さんに聞いてみました

地域や職場・学校などで、 自分が防災関連の委員や役職を 担うことについてどう思いますか

防災関連の役割は「できればやりたくない」という人が約半数ですが、「ぜひやりたい」「機会があればやりたい」という前向きな回答も4割を超えています。誰もが無関係ではられない防災だからこそ、身近な場所での助け合いの輪に一歩踏み出してみませんか。



ぜひやりたい
(すでにやっている)

職場で講習を受け、初期対応にあたる役割を経験。防災意識を高められて、自身や周囲にもメリットしかありません。
(みーにゃんのははさん・50代女性)

できれば
やりたくない

子どもが小さいので。家族の安全が確保されないと、被災したときに役割を果たすことができないと思う。
(レオさん・30代男性)

機会があれば
やりたい

地域の輪に参加しつつ役に立てるのであれば、仕事や家庭に支障がない範囲で試しにやってみたい。
(スエさん・30代男性)

できれば
やりたくない

防災の知識が乏しいことが大きな理由です。機会があれば挑戦してみたいと思います。
(たつやんぐさん・30代男性)

機会があれば
やりたい

誰かが担う必要がある役割だから。
(Sioさん・50代女性)

できれば
やりたくない

必要なことだと思うが、そこに割ける時間がないから。
(そんさん・30代女性)

やりたくない

結局意見は反映されず、雑用としてこきつかわれるだけだから。
(浅紺さん・40代女性)

機会があれば
やりたい

防災についての知識が浅いが、携わることによって学べると思った。
(もやしもんさん・20代)

できれば
やりたくない

仕事をしており、私生活で仕事をしにくいから。
(いしさん・30代女性)

機会があれば
やりたい

防災は誰にとっても関係あることだから。関係ない人はいないと思います。
(ccさん・40代男性)

ぜひやりたい
(すでにやっている)

町会の防災担当をしています。大変ですが、動ける人が動かないと仕方ないですね！
(Yさん・40代女性)

できれば
やりたくない

休日や夜間に呼び出しがかかることが負担だから。古い人の意見が強く、新しい人は窮屈なことが多いから。
(ずんこさん・40代女性)

できれば
やりたくない

消防団員なので、できれば他の人にやってもらって防災に関する知識を皆に持ってもらいたい。
(1さん・40代男性)

ご意見・ご感想をお寄せください

綴じ込みはがきまたはアンケートフォーム <https://logoform.jp/f/XgCzc> (右のQRコード) からご回答ください。次号に掲載された方には図書カードをプレゼントします。



※掲載時には内容を要約するなど、一部修正させていただくことがあります。ペンネームの記載がない方の名前は、イニシャルで掲載します。記入いただいた個人情報は本誌に関する以外に使用せず、正当な理由がない限り無断で第三者に提供しません。

『Shall we?』

第76号特集

「アンコンシャス・バイアス」
に寄せられた
読者の声

●「PTAや保護者会に参加するのは母親」というアンコンシャス・バイアスは、私も以前から感じていました。保護者のLINEグループも母親ばかりで、父親も入った方がいいのと思います。
(市内2児ママさん・30代女性)

●子どもの日に、ボールに付けるこいのぼりの順番も、各家庭ごとに異なってもいいと、自然に感じられる気づきをいただきました。
(イグチのオキナさん・60代男性)

●ICUのオールジェンダートイレにはプライバシーを守るさまざまな工夫があり、感動しました。このようなトイレが普及し、使うことに慣れていけば、それが「普通のこと」になっていくのではないのでしょうか。
(みよちさん・50代)



親としての悩みに寄り添います

こころの相談室相談員

子を持つ母の悩みは尽きることがありません。「こころの相談室」でも子育ての相談を受けることがよくあります。子どもの成長過程で、母親の気持ちは揺れ動きます。幼少時や児童期は子どもと過ごす時間が多く、他の子と比べて成長が気になり、イライラしたり不安に思ったりしがちです。思春期・青年期には子どもの様子が把握しにくくなり、反抗心をぶつけられて、落ち込んでしまう場合もあり、友人関係や進学、就職など、悩みごと多方面にわたります。

こうした子育ての悩みを和らげるひとつの方法としては、子どもの気持ちと状況をいったん脇に置き、まずは母親自身の気持ちを整理することが有効です。

相談では母親の気持ちに焦点をあて、悩んでいる状況をじっくりお聞きします。何度かお聞きするうちに、自分が今まで意識していなかった気持ちを感じたり、過去の体験からの影響や夫婦関係に意識が向いたり、子どもに成果を求め過ぎていたのではないかという自問など、さまざまな気づきがあります。良いところをほめて気持ちに寄り添うことが、子どもとの良い関わり方だと言われますが、そのためにはまず、母親が悩

む気持ちを吐き出せること、そして他者に気持ちを受けとめてもらうことが必要です。「誰にも言えなかったことを話せてよかった」とおっしゃる方もいます。子育てで悩むことがあったら「こころの相談室」を、ぜひご利用ください。

●こころの相談室 ※事前予約制

専門の相談員がお話を伺い、一緒に解決の糸口を探します（1人につき50分まで）。

相談日時：〈女性向け〉毎週木・土曜日午後1時～5時
〈男性向け〉毎月第3水曜日午後5時～8時

利用方法：平日午前8時30分～午後5時に相談・情報課（市役所2階 ☎0422-44-6600）へ

●こころの相談ダイヤル ※予約不要

カウンセラーが電話で相談に応じます（1人につき30分まで）。

相談日時：第2火曜日午後1時～4時
第4火曜日午後5時～8時

利用方法：相談員直通電話 ☎0422-29-9864へ



編集後記

女性の防災活動への参画促進から、より多くの視点が取り入れられ、広範なカバーが進むことを願います。助け合い・共助の観点で防災が地域交流や楽しみにもつながると感じました。私もできることを学びたいと思います。（石井将直）

防災は誰にとっても重要なテーマですね。いざというときの備えを、性別を問わず皆で話し合って、取り組んでいけたらいいと感じました。その一助になるような内容に関わって本当に良かったです。（清水嘉寛）

私が住む井の頭地域は、井の頭公園や玉川上水に囲まれており、災害時に大型車両が入りにくいと言われていました。町内会の方に勧められて、ご近所ともしものときに「共助」するため、家に消火器を置きました。（松井真由美）

防災に取り組んでくださっている方がこんなに身近に、こんなにたくさんいらっしゃるなんて驚きでした。無知を恥じつつも感謝の気持ちを持ち、私も自ら地域防災に関心を寄せていかねばと思いました。（山本磨希）

男女平等参画相談員のご案内

男女各1名の弁護士が、男女平等参画に関わる人権侵害（セクハラ・マタハラ・パタハラ・DVなど）についての相談をお受けします。

◆利用方法 平日午前8時30分～午後5時に相談・情報課（市役所2階 ☎0422-44-6600）へ直接または電話でご予約ください。

三鷹市女性交流室のご案内

市民（在勤・在学含む）や市民団体が、男女平等参画に関する活動を行うための施設です。他自治体の情報なども提供しています。

◆所在地 下連雀3-30-12 三鷹市中央通りタウンプラザ4階
◆開館時間 月～土曜日午前10時～午後9時50分
◆問い合わせ 三鷹国際交流協会 ☎0422-43-7812

『Shall we?』は右の二次元コードから電子ブック・PDFでもご覧いただけます。



Shall we? 第77号 2023年9月発行

企画・編集：三鷹市企画部企画経営課平和・女性・国際化推進係

〒181-8555 三鷹市野崎1-1-1 ☎0422-29-9032

市民編集委員：石井将直、清水嘉寛、松井真由美、山本磨希

制作協力：(株)文化工房

